

けもの坂を上るとき、バイクはさんざん悪態をつく。

角砂利の厚く敷かれた坂の入口にさしかかったところで、後輪が車軸をひきはがそうと跳ね、小石を道端の椎や椿の茂みに弾き飛ばす。弾かれた小石は、乾いた埃を巻き上げ、椎や椿の古い幹々に、十発、二十発と命中する。

ハンドルも、負けていない。後輪が右に跳ねると左に、左に跳ねると右に傾き、その度に僕を振り切り、放り出そうとする。

極め付けはエンジンで、セカンドからローにクラッチを踏み込んだ途端、座席シート（小さな穴が空いているため、ビニール袋の覆いを被せている）に衝撃的な振動が伝わる。それは、次の瞬間、あたりの風景もろともすべてを吹き飛ばしてしまうのではないかと、という恐れを抱かせるに十分なマフラーの鳴動を伴って、全身を痺れさせる。

やっぱり、中古品はいけない。値段も、破格の五千円だった。

中古品といっても、新品が自然に古くなった、というものではない。叔父の友だちの魚屋が、配達用に使っていたものを、飲んで軽トラの横っ腹にぶつけ、オシヤカになったところで、仲間の修理屋がひきとり、使える部品だけを集め、すでに廃車した幾台分の部品とを組み合わせ、僕のために作ってくれたという代物だ。

だから、青緑色のペンキを塗りたくった外見はいかにも「ホンダ」であるのだが、胴体部分はどう見ても「カワサキ」であったり、「スズキ」であったりする。

「新車なら最低十万円。いまだき五千円のバイクなんぞあるもんか。けども、そんなに捨てたもんじゃない」

叔父と修理屋は、ミシン油のしみ込んだセブンスターをまわし呑みしながら、不服さを露に示し始めた僕に試運転を命じた。

ところが、どう間違ったのか、キック一発でエンジンは見事に点火した。

自転車用のものに違いない薄っぺたいシートに、もんどりうって腰から落ちた僕は、あわててハンドルにしがみつき、ほうほうの態で体勢をたて直した。

そこが校庭でなかったら、恐らく民家の石塀に激突するか、バスかトラックと正面衝突して、腕や足の一、二本は折るか、あるいは頭をカチ割って、その日のやけに赤い夕焼けが僕の見納めになっていたに違いない。

それほど、バイクは百メートルダッシュよろしく駆け出したのだ。った。

僕がびっくりしたのも無理からぬことで、叔父と修理屋が交互にキックをやっては頭をひねり、その度にプラグを抜いてぼろ布で拭くのを、小一時間も眺めていた。

あげくの果てには、点火しないまま急勾配から駆け下り、その反動を利用してクラッチを踏み込み、ようよう走り始めるといふところを何度見たことだったか。

だから、僕の手にはバイクが渡されたとき、クラッチはセカンドのまま、アクセルは半分以上吹かしたままペダルを踏み込んだのだ。った。

校庭を半周して戻ってきた僕に、二人は「ほらよ、やっぱりもうけもんだけ」と顔を見合わせ、五千円札をポケットにねじ込み、道具箱を抱えると、修理屋の軽トラにとび乗ってさっさと消えてしまった。

けもの坂は、僕の出張所が受け持つ管内の五つの班のうち、一番北の「釘山」という班の入口に当たる。釘山の公民館長の鹿内さんの家は、山地に散らばっている釘山班内では最もとっかかりのよい場所にある。

三十度近い傾斜が二百メートルばかり続くけもの坂（地図の上では「岳の辻山道」と書かれているが、地元の人には誰も公称で呼ぶ人はいない）を上りきったところが、鹿内さんの門口である。

僕は、少なくとも一日に一度は鹿内さんを訪ねなければならぬ。本庁から送られてくる公報や回状や、出張所で作る館長会の通知などをもって、五つの班の館長に届けることになっている。

釘山班は、大雨が降れば鉄砲水が出、日照りが続くと旱魃で、そのせいでもないのだろうが、訪ねる回数是他の班のゆうに二倍にはなる。

僕は、マフラーの破裂音がもとのリズムをとり戻すのを待って、ローのままゆっくりとアクセルを吹かしていく。けもの坂を上るには、こうやるのが最良の方法であることを、八か月の間に体が覚えてしまった。

バイクは、じわじわと椎や椿の並木を追いやり、葉を振るい落としたり大銀杏の立つ中間地点へと近付いていく。大銀杏を過ぎると、いく分傾斜が緩やかになることもあってバイクの方が自信をとり戻すのか、あとは自然に鹿内さんの門口までたどり着く。

鹿内さんは、門口に立っていた。

バイクのたてる唸りだけでそれとわかるし、よほどのことがない

かぎり、十時過ぎの班巡りの一番に釘山に寄ることに決めていたから、鹿内さんも軒先で鎌を研いだり、縁側で茶を飲みながら爪楊枝をつかったりしている。

鹿内さんは、YKディーゼルという名前の入った茶色の帽子をいつも被っていて、銀の差し歯を爪楊枝の先で突つきながら、「まあ、あがらっせ」と縁側に僕を招く。五十にはまだまだ遠い歳なのだが、後ろ向きになるとガニ股のせいかな、腰がふわりと浮いたり沈んだりして、もうりっぱな爺さんに見える。

僕は、鹿内さんの奥さんのいれてくれるお茶を飲みながら、ゴム紐でくくった書類を鹿内さんの膝元に差し出す。

その間、鹿内さんは大銀杏のはるか向こうにうつすら筋を引いたいわし雲に目をやり、不精髭の生えた顎をひねりながら、「今度の台風には魂げたな。釘山神社の屋根は、二か月経つたいまもまる裸じゃ。田圃ばかりか、頼みの蜜柑もいかれてしもたで。おかげで、釘山の衆は半分は日雇い、あとの半分は博多なんぞの荷揚げ人夫に出かけてしもた。こうなると、山下の婆ちゃん、いよいよこれだぞな」と、首を絞める真似をし、白目をばたばたさせる。

「なんとかならんかの」
鹿内さんは、やたら長い首をぐるりと回し、喉仏を一つ上下させた。

二か月前に襲った台風十九号は、瞬間最大風速六十二メートルという途方もないもので、気象台始まって以来というものだった。

喜之さんという班で最長老格の爺さんは、「釘山じゅうがよ、根こそぎもってかれる思うた。まわりの木という木は、バンザイしてあつという間に吹つとんだ。こんな怖え思いをしたのは初めてじゃ。一晚中鎮守様、鎮守様、と震えておつた。そいが、明けてみたら鎮守様もつるつるてんじゃがあ」と、歯のない口をわななかせ、訪ねてくる誰かれかまわず話しかける。

喜之さんは、百年続いたという家の、崩れた納戸のあたりから奇跡的に傷一つ負わずに救け出され、いまは同じときに住家を失った八世帯と一緒に、班の公民館に住んでいる。

台風十九号は、九月末の金曜日の夕刻、突如砂礫とともにやってきた。

ニュースでは、かなり大型の台風が接近しているという話は伝えていたが、コースも北に抜ける筈だったし、なにより、襲来するのは深夜か翌朝になるという予報だった。

五時のサイレン（僕が時報に合わせて鳴らすのである）の音が途切れるのを待ち、出張所の玄関先の黄味を帯び始めた楓の葉末を見上げた。梢は、一枚の葉の揺らぎもなく、西日の照り返しを受け、

まばゆいばかりに輝いていた。

出張所と軒続きになっている保育所は、つい数十分前まで子供たちの甲高い声につつまれていたが、帰園時間を過ぎ、園庭の遊動円木はまるで動くことを忘れたかのごとく、こつてりした西日を溜めたままじつと宙に浮いていた。

気配すらなかった。

だから、僕は五時のニュースを改めて聞くこともせず、玄関の鍵を内からかけ、窓際のカーテンを引き、まだ締めていなかった納付金の整理を始めたのだった。

税金、有線放送使用料、諸証明書手数料など、項目別に選り分け、現金と照合する。

僕は、この作業が一番の苦手である。

項目別に分け、それぞれ金額を集計し、現金と照合するときのなるともいえない緊張。金額がびたり合うのが当たり前であるのだが、ときには信じられない間違がある。一万円札と五千円、あるいは千円札との勘違い。そうとしか思えないミスが、頻繁に起こる。

延滞金の計算が面倒なことも、理由の一つである。それに、所員の少なさだ。なにしろ約五百世帯を預かるのに、所員は、所長と僕の二人だけである。

四半期毎の納税期だけではなく、月々の有線放送使用料や、日々の諸証明料、それに出生した牛の登録（届け出の度に、僕が「鼻白」とか「正太郎」とか命名してやらねばならない）料とかが、切れ目なく入ってくる。

そんなこともあり、札から数え始め、最後の硬貨を数え終わるときの下腹のむず痒い感覚が、どうにもよくない。帳簿で出した額と、数えた額とがびたりと一回で合うことはめったにない。そうになると、また札から順に数え直すことになる。

殆どの場合、二度目か三度目かにけりがつくのではあるが。

その日も玄関を閉めた後、なかなか合わない額に手をやいていた。何度数え直しても、何度帳簿の検算をしても合わない。

窓口に立つのは僕ばかりでなく、僕が班巡りをしているときは、所長が延滞金の計算をし、牛の名前をつけなければならぬ。所長の場合、細かい事務には疎いこともあって、釣銭の間違いがときどきあるので、一番にそこを点検する。

しかし、どうやら釣銭の間違いではなく、僕が一桁間違えて少なくて徴収したらしいことがわかった。

桁を間違えるといっても、百の位と十の位の数字を取り違えたぐらいのことであるからまだよかった。実際、二百円とあるのを二十円とみて徴収したのだ。僕は、自分のサイフから不足分の百八十円を取り出し、手提げ金庫にそっと入れた。そうやって、今度は本庁

への報告書の作成にかかった。

玄関のガラスが揺れ、ときおり砂礫が音をたて始めたのは、午後六時をほんの少しまわった頃だった。

カーテンを開いて見上げた空に、黒雲の塊が層をつくり走っていた。ほんの先ほどまで、澄みとおった秋の気に満ちていたあたりに、動物が足音をけたてて走りくるのかと思われるほどの地鳴りが、渦を巻きながら迫ってきた。

僕の頭の中からすっかり抜け落ちていた台風十九号が、いきなり目前に現われたのだった。テレビをつけた。

画面は台風情報ではなく、テロップが流れていた。「午後五時頃、長崎県西部に上陸。速度を速めながら東に進んでいる。午後七時頃には福岡市に達し」

僕は園庭の楓が吹き上げられ、泳ぎ、瞬く間に葉の一枚も残さず打ち落とされていくのを見た。そして、全く葉を失った枝に、なおも容赦なく黒雲の塊が躍りかかってくる。

あつという間だった。それまで、なにごともなく暮れようとしていた空に、突如巨大な翼が羽音をたてたかと思うと、間髪をいれずに爪を下ろしてきた。

遊動円木が、右に左に振れる。円木が支柱にぶつかり、ぶつかられる度に支柱も喘鳴をあげた。

斜め向かいにある農協の看板がしばらく煽られていたが、抵抗する間もなく千切れ、出張所めがけて飛んできた。僕は思わず目をつぶったが、幸いなことに出張所を逸れ、裏手の小学校の校庭に落ちたらしかった。

飛ぶのは看板ばかりではなかった。瓦が飛んだ。軽々とめくられ、次々に飛ぶ。それに木の枝、板の切れ端、ポリ容器、トタン。

出張所のガラス窓が、破られたらしかった。

僕のまわりで、生臭い風が稲妻状に舞った。寄りかかっていた机が、ふっと浮いた。あたりの書類が僕の体に張りつき、次の瞬間、僕の皮膚をひき剥がす勢いで散っていった。

軒続きの保育所のあたりで、なにかが崩れ落ちた。教具類であったか、ロッカーか衝立であったか。

僕は、玄関横のガラス戸が大きくたわみ、ガタつくのが気掛かりであったが、それより先に、破られたガラス窓がどこであるのか、つきとめねばならなかった。

廊下に出た。廊下は、もう掃き溜めだった。

いつの間に、どこから運ばれてきたのか。木の葉や新聞紙、教具のボールや定規や色紙などが嵩をなし、それが今度は、逆向きの風

に煽られ、一斉に反対方向に走り出す。

最初に破られたのは、事務室隣のトイレの高窓だった。多分いくらか隙間があったとみえ、風の爪先はいつも簡単に窓枠ごとひきまわったに違いない。落ちた窓は、土間のコンクリートに叩きつけられ、枠ごとひしゃげている。

破れた窓から躍り込んできた風は、突き当たりのドアを吹き飛ばし、漆喰壁に行く手を阻まれると、直角に折れて保育所に牙先を向けていた。保育所のガラス窓の数枚が開かれたままだったらしく、風はなんなく部屋の机や衝立を蹴散らし、黒板を剥がし、いよいよ勢いづいたとみえて、殆どありつたけのガラス窓を小学校の校庭に弾き飛ばしていた。

僕は、そのときになって、この広い建物の内にいるのは自分一人であることに気付いた。所長は、本庁での会議に午後から出たままだったし、二人の保母は定時に帰宅している。

反射的に、僕は事務室に引き返した。誰かに連絡をとらなければならぬ。とにかく、この状態を一時も早く本庁に知らせなければならぬ。

受話器をとった。ダイヤルを回した。しかし、受話器にはなんの抵抗もない。すうつと、空気の抜け落ちていくみたいなたよりなさだけが耳に残った。

テレビを見ようとした。テレビは、画面を映し出さなかった。

窓の外は、すでに暮れかかっていた。農協の建物のはるか上方に聳える釘山の稜線が、激しい凹凸を繰り返していた。

いつの間にか、かなりの時間が経ったらしかった。三十分か、一時間か。それとも、二時間近くか。

いずれにしても僕は、この古びた建物に一人なのであった。昼間だと、六十人の園児たちが片時も静まらないこの同じ場所に、僕は一人とり残された。

玄関のガラス戸は、なんとか風圧に耐えていた。いく分西寄りの風のせいもあった。それでも、ようやく肩で呼吸を整えているという具合だった。

けれども、カーテンの向こうで動く影は、尋常ではなかった。出張所の屋根の二倍の丈はあろうかという楓が、玄関先に横たわり、ときどき尾鰭をひくつかせていた。いつもは、深夜まで路上を眩しく照らしている農協の窓々の灯りはなく、薄闇のなかに、キラリ、キラリと瓦が舞い上がっては落ちていく。

雲が低く速く流れていた。雲というより、靄といった方が適切かもしれない。黒々とした靄の塊が、壁に石垣に鉄柱に跳ね、激しく飛沫いていた。

ドウドドと地鳴りがした。太くて鋭い牙の主が、喘鳴とともに支

離滅裂な大股であたりをのし歩いていた。

そのうち、すつと地鳴りも、喘鳴も、靄も消えた。ころなしかあたりが明るくなった。うつすらと、西日が玄関のガラスを射始めた。

あの日から、二か月が経った。

午後七時頃いったん台風の目に入った後、それから一時間ばかり吹き荒れた、吹き戻しによる被害の方がひどかった。

出張所は、窓ガラスが割れ、建物の中を強風が荒れ狂ったにもかかわらず、壁が破られたり、軒が傾いたりというところまでは至らなかった。屋根瓦の一部が飛び、樋の半分ばかりが吹き千切られ、それに園庭の楓の木が倒されたぐらいで、なんとか済んだ。

旧村時代の村役場であり、村議会場でもあったというプライドが、風速六十二メートルの強大な圧力をかろうじて撥ねのけたのかもしれない。

しかし、出張所管内の被害となると、途方もないものだった。

道路を一つ隔てた農協の倉庫は、屋根が数十メートルも飛ばされ、商品の農機具や、電気製品や、肥料などが全く使いものにならなくなってしまった。肝腎の看板は跡形もなく千切られ、事務所が営業できる状態になったのは、丸二日経ったあとのことだった。

管内の田圃は、実り始めた稲穂をしたたかにうち落とされてしまった。まだ実を結ぶ前だった品種も、株が根元から折られ、へどろに埋もれて腐臭を放ち始めた。

釘山地区では、杉や松の植樹の六割が壊滅状態だった。その殆どが三十年もので、親の代からの貴重な財産を、二束三文で処分しなければならなくなってしまった。

僕は、山下サツの家が物置だけを残して全壊したことを知っている。

サツのところは、他の班に比べて生活レベルの劣る釘山のなかでも、僕が「一番」という折り紙をつけている。

そもそも全壊した母屋そのものが、雨戸も襖もなく、使える畳は二、三枚といったところで、雨が降れば土間に泥水が流れる、という具合だった。勿論、電話もなければ、電気もない。持ち物といえ、綿のはみ出た薄い布団が上下一組と、小さな茶箆筒といった程度であった。

サツの家は、釘山の班内でも最も奥まったところであり、釘山神社の森を過ぎ、最後の六軒の集落が途絶えて、なおも十五分ばかり傾斜の急な小道を上らねばならない。

僕のバイクでは、この小道には全く歯がたたないので、薄の生い

茂った土手に車体を預けたまま、歩いて上ることにしている。

サツは、いつも物置の土間の隅にいて、背中を丸めている。土間の窪みには、小石を積んだ竈があり、そこで豆やくず芋を煮ている。サツの着ているものは、格子柄のもんぺと、何色のだかわからない丹前で、つぎ当ての上につき当てが重ねられ、そのつぎ当てが破れ、糸屑や布の切れ端がサツの動きに合わせて踊った。

見かけの割に耳は達者で、僕が草道を分けて門口（「元門口」といった方が適当かもしれない）に近付くと、サツは「ススキ」の頭をおもむろに揺らし、白く濁った目を掬い上げる。もつとも、その目には僕の姿は僕とは映らないらしい。

「茂男け、茂男」

出張所の住民台帳では、山下サツの長男の茂男という人は、二十八年前に死亡、となつている。満二十歳になったばかりの秋である。

鹿内さんの話としては、茂男という人は、中学を卒業後、福岡の農学校を出て、この釘山に最初に蜜柑栽培をもち込み、ようやく収穫の見込みがつき始めたという秋の晩、台風に曝される蜜柑山を見回りに出かけ、翌朝増水した川原にうつぶせになっているのを消防団員に見されたのだという。

「鎮守さんのすぐ真下の川原でな」

鹿内さんは、顎の骨をひと捻りしながらそういい、多くを話さない。そうしておいて、ほおつと腹のあたりから息を吐く。

「婆ちゃん、な、いまでも死んだと思うてないのよ。あの晩、ふむ、台風十二号だっけかや、玄海灘を突っ走ったのよ。風速四十メートル。雨も雨じゃったな。トタン屋根にそれこそ百万本も錐が刺さってくるほどの降りやった。婆ちゃん、茂男のこと、まだ福岡の農学校に通うてる、そう思い詰めとる」

ところが、喜之さんの話しになると鹿内さんとはちよつと訳が違つて、「茂男にはそげんな甲斐性はな。なんつうか、エレケとかいうやつに凝つてな、不良が四、五人寄つて、鎮守さんの堂で毎晩カミナリみてえなでつけえ音たてた。あの嵐がくる前、茂男がエレケ抱えて堂に籠もつたのを、俺が追っ払つてやったのじゃい。俺は、なんてたつて氏子総代じゃったからな」ということになる。

茂男という人が、福岡の農学校でエレキを覚え、近在の仲間を集めて特訓していたというのは本当らしい。

髪を肩まで伸ばし、歩くとパカツと風を切る裾の広いズボンを通き、蜜柑の消毒などをしていたという。

だから、評判のよいわけはなく、練習場所も公民館を追われ、農機具会社の倉庫を追われ、釘山神社まで逃れてきた、ということが真相であるらしい。

「神杉の枝が裂け落ちてな、それに打たれたのよ。違えねえ」

喜之さんは、違えねえ、というところを力を込め、俺は氏子総代じゃったからな、と舌を舐めながら何回も繰り返す。

僕は、台風十二号で裂けたという神杉の枝の跡を見て、当時でも一抱えは十分にあっただろうと思われるその太さに唸ったものだった。その真下に、茂男が倒れていたという川がある。

川は、苔石を沈め、水草を分けながら、音もなく流れている。

「茂男、茂男け」

サツは、腰くだけの格好のまま丹前を翻らせ、僕の鼻先に顔を突き出す。

「戻ってきたか、茂男」

その目は、僕を突き抜け、後ろの空に向けられている。白く濁った眼に、柿の実が流れていたり、山の稜線が歪んで映っていたりする。

「変わりはないか、婆ちゃん」

僕たちの会話は、いつもこう始まる。涙を垂らしたサツの頭が、僕の胸に体当たりし、肉という肉の殆どない腕が宙でもがく。僕はその腕をとらえ、薄い丹前を露になった骨身の部分に被せてやる。

サツが食べるものは、組内の畑に転がっている収穫の後の屑芋や、大根葉や、田螺や泥鰌、といったものである。それらを、釜で煮込み、縁の欠けた茶碗に盛って、信じられないくらい速さで歯のない口に押し込む。

「腹減って、腹減っての」

次にくる会話はこうなる。ここまでは、いつものパターンである。腹減っての、といいながら、皺だらけの口元から涎を流し、首をクウクウ鳴らす。

食っても食っても、サツの身にはつかないらしい。

確かに、サツは食べることは食欲で、誰ぞの畑の白菜はうまいとか、どこの田圃の泥鰌は一味違うとか一見識をもっている。その誰ぞの畑から抱えてきた白菜の屑を、入口から土間の奥まで並べ、熟柿だの椎の実だの、南瓜のひからびたのを、自分が手を伸ばせば届く範囲にぶら下げている。

「茂男、ほれ、もつと食え」

茂男ではないと断り、生活の方はうまくいつているかと、熟柿を一つ舐めながら話していると、サツは棕櫚の葉でゆわえた一回り大きい熟柿を差し出す。押し戻すわけにもいかないもので、それをもう一方の手に握り、汁に濡れるのを気にしながら、話の続きに入る。

「姪の菊乃さん、ちつとも寄りつかないの」

「菊乃、さあ聞かんな」

住民台帳の上では、二年前まで姪の菊乃と、その子供の千春という二人がサツと一緒に住んでいたことになっている。

二人のことは、鹿内さんも「あんな別嬪の親子、わしゃ後にも先にも見たことねえ。それも、菊乃の方、ミス日本みたいな顔立ちでよ、思い出してもぞっくりくらあ。なんでもな、博多の街で夜の商売やってたつう。けども、まさかあの婆ちゃんと同じ血いが混じつとるなんざ、信じられん」

菊乃が釘山にいたのは、一年二か月というわずかの間に過ぎないが、このボロ家にやってくる連中は、隣町からの男たちも含めて、たいへんなものだったという。

「菊乃の裸を拝ましてもらうのよ。門口のあたりに潜んでな。なんてったってこのあばら家じゃから、湯を使うのも難儀なことでき。やつばらは、月明かりや蠟燭の明かりにぼおつと浮き出る菊乃を、藪蚊に食われながら、たらーつと眺めとった」

口振りから察すると、どうやら鹿内さんも大勢の連中のうちの一人だったのでないだろうか。話しの途中に、そ知らぬ方を向いてポツと煙草の煙を空に吐くのであるが、首筋になにやら怪し気な赤みがさしてくる。

その菊乃は、ある日、黒いスーツを着こんだ四、五人のいかつい男の出迎えを受け、また博多に戻っていったという。

「一年二か月というもの、この釘山がまるで花畑みてえだった」

鹿内さんは、胡坐の膝を何度も組み替え、貧乏揺すりを止めない。

「菊乃さん、なんの連絡もないの」

「ん、菊乃、そんなもの、知らんて。それよか、茂男、戻ってくるならなぜもつと早いわん。もう、学校の方はええのんか」

茂男ではない、と僕はまた断る。自分は出張所の者で、台風のことや、婆ちゃんの暮らしのことが気に掛かるからきた、とサツの耳元で大声でいう。

「家、潰れてしもただろ。どうする。なにか当てでもあるの」

「当てか、おうおうあるとも。茂男が戻ってくるんじや。そしてこと、なんも心配ない」

サツは、ドンと胸を叩く。

「茂男さん、戻ってくるの」

自分ながら嫌味なことばだと思ふ。

「茂男はな、茂男はいま、福岡の農学校に通うとる。二年経ったら戻ってくる。したら一緒に暮らすのよ。あの子の父親が早よに死んでしもたから、わしが一人で育てた。ようできた子でな、茂男さえ戻ってきたら、こんな家、どうにでもなるじゃあ」

「なら、大丈夫だね。でも、このままじゃ困らないかな。この物置

には、ちやんと住めるの。とにかく一応、福祉事務所に話しだけはしてみるから”

それから、扶助費の支払い日は十五日だからね、といいおいて、熟柿を両手に握ったまま草道を下りてくる。

僕には、もう一つ気に掛けていることがあった。この町役場の出張所に来て八か月。最初、一浪後のショックから、半ば捨て鉢な気分です職を選んだのであったが、三か月、五か月と経つうちに、やっぱり進学への思いが兆し始めてきた。

秋口あたりから、バス通学の受験生たちの表情が引き締まってきた。雨の日など、僕もときどきバスを利用することがあったが、夏休み前までは、悪ふざげばかりしていた彼らが、曲がりくねったアスファルト道での揺れをもともせず、参考書から目を離さなくなっていた。

この時期の、なんともいえない緊張と不安の入り混じった気分を、二度経験しているだけに、僕の奥底で蠢き出すものがあった。

ひよっとしたら、いまでもまだ間に合うのではないか。二年もの間目標にできたものを、意気地なく放り出したまま、自分はなんという日々を過ごしているのか。

それはともかく、一浪後のこの四月に、自分はいったいなぜ進学への道を放り出してしまったのだったか。

直前まで家業の農業を継ぐことを課されていて、高校三年になつてから、急遽進学をめざす方向に転換した、ということもあった。

もともと、中学、高校と、大学進学へ向けてなにか一つ準備をしていなかった、ということもあった。

一浪中の秋口、盲腸炎をこじらせ、秋口からの四か月の間に、二回の手術をしたということもある。

特に、最初の手術は四時間にわたるもので、患部の癒着がひどく、あと一時間処置が遅れていたらどうなっていたかわからない、といわれるほどのものだった。

退院後、なんとか受験の体勢が整ったのは、入試直前の二月始め、ということもあった。

けれども、そんなことは理由にならない。自分は失敗したのだ。

同期の誰にも通常の成績では負けたことがなかったのに、結果は惨たるものだった。自分が秘かに見下していた連中は、それぞれの志望を、ほぼ予定どおり貫いている。

僕は、出張所からの帰りに町の本屋に寄った。

台風十九号がくる一週間ばかり前のことだった。

見慣れた受験参考書のコーナーをやり過ごし、これまで覗いたこ

とのない書架の前に立った。

就職試験、資格試験のコーナーだった。目指す本を、僕はすぐ手にすることができた。公務員試験案内書だった。

僕の頭の中に、一つの図式ができていた。

とにかく、なにがなんでも、大学のある街に住まねばならない。そのためには、自活できなければならぬ。

そして、いまの時期にまだ願書が間に合うところ。

それは、すぐに見つかった。

福岡市の職員採用試験だった。福岡市といえば、九州で最大の都市。その福岡までいけば、なにか糸口がつかめるに違いない。

動機は単純だった。福岡までいけばなんとかなる。そう考えたとき、胸の奥でわだかまっていたものが一挙に弾けた。

高校二年の頃まで、ぼくの受験を思いとどまらせようと必死だった母も、いく分柔らかくなっていった。

「五反の田と七反の畑、それに二町歩の山、これが全部お前のものになるんだよ」

「八代のご先祖が眠つとらす。放つたらかしたら、どんなに罰当たりなことか」

これが、母の殺し文句だった。

小学校の中学年になった頃から高校二年の終わりまで、母は僕の机の傍で殆ど毎晩この台詞を吐いた。

「先代が、戦前の難しい時期に、必死で守り通してきたこの土地を、お前が守らないで誰が守る」

僕は長男である。下には妹が二人いる。

母は、一番下の妹を産んだ頃、リユーマチからくる心臓弁膜症にかかって、田畑の仕事が思うようにできなくなった。

それは、まだ幼かった僕たちの目にもはっきりわかる症状を示し、麦畑で倒れ、稲刈の鎌を握ったままで突っ伏し、という具合だった。そうになると、僕たちは、なにはおいてもすぐに診療所まで走らなければならなかった。

実際、「サヨナラ」を母がいったのは、十回にもものぼるだろうか。

僕と、三つ下の妹、それに八つも歳の離れた妹は、その度に母の枕元に座らされ、胸を掻きながら息を荒げる母の姿に、自分の呼吸をすることさえ忘れ、震えていた。

もともと顔色がよくない母であったが、発作のときは、唇は茶色に、顔面は蠟色に変わる。額からこめかみにかけて脂汗を浮かべ、もつれる舌で赤ん坊みたいな泣き声をたてた。

「この家の六代前、袈裟掛けに倒された人がいる。その人がこの人に憑いておる。その人は、自分が闇打ちに遭い、すでに息絶えたことに気付いていないのじゃ。その祟りがこの家を包んでいる。この家は、この代で終わりになる」

祈祷師は、神がかりになると、激しい苦悶の様相を全身に表し、そういった。いくらその日が梅雨晴れの蒸し暑い日だったとはいえ、祈祷師の、衣を濡らし、額から、顎の先から飛び散る夥しい汗に、僕たちは度胆を抜かれた。

一番ショックを受けたのは母で、自分の頭上にかざされる榊の風を切る音のうちに、確かに刃物の切り結ばれる音、闇夜を一閃する鋭い太刀の唸りを聞いたという。

最初、父は笑って取り合おうとしなかったのだが、母のあまりのこだわりように、土蔵から系図を引っ張り出して眺めていたが、百二十年ほど前の代になにかがあったらしいことがわかると、今度は父のほうで腕組みをする番だった。

「どこの家でも、突ついてみれば埃の一つや二つは出るものさ」

父は、強がりをついたもののそれ以上は口を噤み、湯呑の焼酎を呷るばかりだった。

母が僕の机の傍に毎晩くるようになったのは、祈祷師のことがあってからだということになるのだろうか。

この家が父の代で絶える。それも、母自身にとり憑いた人の祟りで、ということに、母はどれほど鬱々とした日を送ったことだったろう。

ただでさえ間を置かない発作に痛め付けられ、田畑の一通りの仕事もままならない母には、僕に訴えかけるよりほかに手がなかったのかもしれない。

「お願いだよ。大学なら、教育学部にしておくれ。先生になるのだつたらこの町にも口があるし、食べることの不自由もないし」

母は、僕の成績のレベルの連中はみな進学するということを知ると、こんな折衷案をもち出した。高校二年の、最上位にランクされた期末テストの結果を見ながらだった。

それまで有り得ないと頑強にこだわっていた進学のことを、ほんの少しではあるが認める口振りになったのは、このときが初めてだったと思う。

先生だったら、田畑の仕事を前がすることもないだろうし、ゆくゆくは校長にだってなれるかもしれない。いいや、お前だったら、きつとなれる。これだったら文句ないだろう。

わたしだって、祈祷師にあんなことをいわれた手前、父さんの代で終わらせたら、なんと世間様にいわれるか。

もし、教育学部が嫌なら、農学部はどうだい。農学部だったら、園芸試験場に入ることができる。園芸試験場は、研究をするところだというから、立派なものだよ。農学部か教育学部。どう、これなら悪くないんじゃないかい。母は、涙声で、僕の机に額を擦り寄せた。

僕が受験したのは文学部である。なぜ文学部を選んだのかといわれると、先生になるにもたいして縁がなさそうであり、町の研究者にもなれそうにもない学部を、狙ったともみえる。

実際、そのことが頭の隅で大きな比重を占めていたということは間違いではない。母のことに敢えて挑もうとした、ということも嘘ではない。

ともあれ、僕は、とても進学などできそうにもないという鬱屈した思いを抱え、模擬テストの結果などを声高に話し合う連中を横目にしながら、高校に入ったばかりの頃から図書館に籠もるようになった。

その図書館の古典全集で、初めて啄木を知り、中也を知り、朔太郎を知った。

僕は、台風十九号がくる前々日、福岡市に願書を提出した。一次試験は、半月後の日曜日だった。

試験のための準備はなにもしなかったのだが、採用試験の問題は、難しいものではなかった。

そして、二次試験の面接をそれから一か月後に受けている。こちらにも気楽だった。面接官は、もう大学受験は諦めたのかと聞いた。僕は少し返事に困ったが、夜間部にもいけたら最高です、と咄嗟に答えた。

面接官がウンと頷いたとき、この試験は大丈夫だと直感した。

僕がいま気に掛けているのは、二週間後の金曜日、という採用予定部署からの面接通知がきていることであつた。

一次試験のときといい、二次試験の面接のときといい、これまではいずれも日曜日であつた。

所長と二人だけの出張所は、所長が殆ど午後から、会議や打ち合わせで外出するため、空けられない。

班巡りで机を空けるときでも、たいていの場合午前中か、所長のスケジュールの間を縫って出かけることにしている。

そのような状況のなか、転職のための一次試験、二次試験を秘かに受けてきたのだ。

本庁の担当者から怒鳴られ、所長を悩まし続けながら、ようやく

仕事の手順らしいものがわかりかけたところで、あっさり辞めてしまおうというのでは、彼らに対して済まない気がするし、十四年間この机にいて、引き継ぎのときに、この管内のことを頼みますと、こちらが恐縮するほど頭を下げ、定年で去っていった前任のFさんに、なにより済まないと思う。

八か月も経つと、こちらが仕事に堪能であるとないつに關係なく、幾人もの人をつながりができる。鹿内さんや、喜之さんや、山下サツや、ちよつと数えただけでも数十人になる。

この人たちに、自分はこの二か月、出張所を出る準備を着々と進めていた、ということ白状しなければならぬ。そして、母である。

母には、一次試験のときは出張、二次試験のときは秋の慰安旅行といつてあるが、今度の理由のことはまだ考えていない。

第一、出張所が空けられるものかどうかわからない。

万一のとき、出張所の方は病気が欠勤にでもなればどうにかなるのかもしれないが、母のこととなると、さっぱり糸口が見つからない。

三つ下の妹は、僕と違って、母のことばに従うことにたいした抵抗もないらしく、看護婦の資格をとつたらすぐに戻ってきて、隣町の公立病院に勤める気である。

だから、妹の場合、図書館に籠もる必要もなく、母との膝詰めの話しが難航している様子もない。

雨の後のけもの坂は、バイクの車輪が空回りして、うまく進めない。おまけに、ところどころの砂利道が雨に抉られて裂目ができ、その水溜まりにはまり込むと、マフラーが破裂しそうな爆音を発し、ストンとエンジンが止まってしまふ。

その度に、いったん唸りを止めるとなかなか目を覚まさないやつのボディに馬乗りになり、キックの雨を降らせる。やっと目を覚ましたかと思うと、今度は坂道発進の過重に耐えきれず、音をあげる。

これだから、安物は困る。

よほど道端に放置したままで坂を上ろうかとあきらめかけたのだが、荷台いっぱい荷物のことを考えると、思い直してキックを踏むしかない。

十八度目のキックでようやく水溜まりを脱したとき、僕のズボンに泥の跳ねを逆さに浴び、ずぶ濡れになっていた。

ゆっくりと、ゆっくりと坂を上っていく。早咲きの山茶花が花をつけ始めている道端を、水溜まりを避けながら、そろりそろり、歩くスピードにも満たない速さで上る。

だんだんと鹿内さんの屋根瓦が見え、門口の槇の刈り込みが見え、

庭の一輪車が見えてきた。庭には、放し飼いの鶏がバイクの爆音にも知らぬ顔で、牛小屋の前で餌を漁っている。

鹿内さんは、一羽の鶏の前にしゃがみ、バイクの音に背を向けたまま、煙草を吹かしている。

縁先までバイクを乗り入れ、エンジンを切っても、鹿内さんは横顔を見せたまま、じっと一羽の様子に目を見張っている。僕が鹿内さんの後ろまで歩み寄ると、うずくまっていた鶏が、にわかには羽を広げ、低く宙に舞い上がり、十メートルもはばたいて、門口の槇の生け垣を越え、野菜畑まで飛んだ。

それを眺めていた鹿内さんが、手を打ち、腰を揺らして笑い転じた。

「残念、残念。ほんのあとちょっとで卵が出てくるところじゃった。真っ白いやつが、三分目ばかり顔を見せとったのよ」

ポカッと一つ煙を吐き、地下足袋のホックをはずしながら、皺の上下する顔をゆっくり僕に向けた。

「まずいとところに現われた、ですよね」

僕は、エンジンを切った後、まだ微かにあえいでいるマフラーのあたりを軽く蹴った。

「うん、まずいとこじゃった」

鹿内さんは、額の皺を丸く寄せたり、斜めに引き伸ばしたりしながら、高い声でまだ笑っている。

「よう降ったの。崖の崩れたところが十いくつかあるという。台風の後片付けがまだ終わつたらんとところに、またこいつじゃあ」

鹿内さんは大きな欠伸を一つして、昨夜は盥を抱えて右往左往しとつたもんやから、てんで寝る暇などありやあせん、ともう一つ欠伸をした。

「屋根の修理はいつできるかの。あっちもこっちも吹っ飛んでしもたで、なんせ瓦が足りん。その前に、職人が足りんちゅうでなあ」

「農協の屋根も、まだ手がつかない、と聞いてます」

「いまから瓦職人に弟子入りして、ひとつ俺が一手に引き受け、大儲けといくか」

鹿内さんは、丸く寄せていた皺を今度はひっくり返し、膝を叩いて笑った。

鹿内さんは、二十八年前の十二号台風の時、めくれ落ちた二階の瓦を直そうとして濡れた屋根に足をすべらせ、腰の骨を折ったのだと聞いている。

「で、婆ちゃんのことですが」

「ふむ」

「山下の婆ちゃんです。本庁からも二度、三度と尋ねてきていますが、本当に大丈夫でしょうか」

「大丈夫かとな」

「病院に診せるなり、ホームに入れるなり」

鹿内さんは腕を組んだ。腕を組んで、唇を伸ばしたり縮めたりしていたが、何度か診せたことはあるじゃがの、といった。

サツは、医師がどんなに勧めても、茂男が戻ってくるからというはり、この地を絶対離れないというらしい。

ホームに至ってはなおさらで、あれほど嫌がるものをどこに入れてようもないがなど、鹿内さんは、この話にはあまり乗り気ではないらしく、爪楊枝の先で奥歯をほじくりながらいう。

「とはいうものの、婆ちゃんも歳だし、もちつとは考えてやらんといけんわなあ。ところで、婆ちゃん、俺たちの畑の後始末をちゃんとしてくれるでな、ほんに大助かりよ」

鹿内さんは、背伸びをする格好で、背戸裏にこんもり見える釘山神社のあたりを眺めやり、さらに釘山地区の一番奥に当たるサツの家の方角を、目を細め、ふり仰いだ。

出張所の朝は早い。

勤務時間は八時半から、となつてはいるのだが、最初の出勤の日、八時十五分頃着くと、玄関には列ができていた。そして、「いったい何時だと思ふと。前任のFさんは、七時半には玄関を開けとつたとに」と、誰もがふくれつ面をし、煙草の吸い殻があたりを散乱していた。

出張所の管内は殆どが農家であるから、早朝の一仕事を終えた人たちがその帰りに立ち寄る。

「税金、いらんちゅうのか」

「俺たち、完納者だよ。そいが、こんな仕打ちなんてなあ」

「いつまで待たせよ。お上は暢気でいいぜな、お天道様がてっぺん近くにのぼつてからお出まじだからな。俺たちがこんなことしとつた日いいや、すぐに日干しになつちまわあ」

「お前らの給料、俺たちの納める金でまかなつとるんぞ。ええか、そこんとこ、忘れるな」

僕が、慣れない手つきで玄関の鍵を開ける間、彼らは口々にそういった。

玄関が開くと、人々は争って雪崩込んでくる。

金の徴収に時間がかかり過ぎる。書類のでき上がりが遅い。いつまで待たせる気か。と、彼らはいい募る。

あげくの果てには机をこぶしで殴りつけ、足を踏み鳴らし、土間にしきりと唾を吐く。

僕はそれ以来、とにかく前任者と同じ七時半までには玄関を開けることにした。

玄関を開ける前には、事務所の机の雑巾がけをし、床と土間を掃き、花瓶の水を替えた。

だから、僕の出勤時間は、一時間も繰り上がって七時十五分という事になった。

出勤時間が七時十五分になってからは、ようやく頭を下げると挨拶を返してくれる人が出始めた。田圃の中からも、畑からも、購買店からも、短い挨拶が返ってき始めた。

その中には、最初の日、机をこぶしで殴りつけた町会議員や、書類のでき上がりが遅いのでバスに間に合わない、と咬みついてきた道路工夫もいた。

彼らは、あの日のことなどなかったかのごとくに、帽子を脱ぎ、タオルをはずして、ご苦労さんやなあという。僕も、だんだん要領を得て、お早うさんです、とバイクの上から頭を下げる。

慣れてくると、出張所はよろず相談所で、それほど用事のない人でも、玄関の隙間からいつの間にか入り込んできては、客たち同士で話し込んだり、人気がないのを見はからって、嫁のことを聞いてくれという姑や、姑のことを聞いてくれという嫁さんたちがいて、長々と喋っていくのだった。

僕には内容のよくわからない話が殆どであったが、彼女たちの息遣いに合わせて頷いていると、いつの間にか彼女たちの目から涙が消え、もちっと頑張らなきゃいけないね、とか、こんなこと贅沢だかねえ、などと照れ笑いになり、帰っていく。

一日一日の僕の仕事、その仕種、それが必ずどこかで見られており、そして、二、三日のうちですぐ跳ね返ってくるのだった。

「あまり形はよくないけどね」
初めてものをもらったのは、一か月が経とうとしている頃のことだった。

古びた風呂敷を窓口を広げたのは、一番最初に税金の延滞金の計算をしたヨシさんという鍛冶屋のおかみで、風呂敷の中身はおはぎだった。それは、ヨシさんの口とは裏腹に、餡の色艶は輝いており、品よく二段に重ねていた。

なんでも、ヨシさんの愚痴を、嫌な顔色一つ見せず聞いてくれたから、ということであった。

当の僕が、どんな内容のことであったか覚えてないのは迂闊であったが、僕の仕事に対して戻ってきた一つの返事がこれだった。

その他にも、じいつと僕のペン先を見詰めていた人が、達筆やね、と声をかけたり、部屋が綺麗になったよ、といってくれたりした。

班巡りの途中で折りとってきたれんぎょうや紫陽花を、押し入れに転がっていた花瓶に投げ込み、窓口に出していると、ちよつとここで憩わしてもらってもいいかの、という人もでてきた。

とにかく、僕のした一が一になって跳ね返り、二が二になってすぐに跳ね返ってくる。

そういう意味で、前任者のいった「いいところですよ」ということばのわけが、いくらか理解できると思った。

出張所の前が騒々しくなった。前庭に出て遊戯をしていた園児たちが、一斉に散り、誘導円木のあたりに群れ、叫んでいる。

「鬼婆だぞ、鬼婆がきた」

子供たちは、少しずつ後ずさりしながら、声高に叫ぶ。

ガラス戸の向こうに、山下サツの姿があった。サツは、つぎ当てだらけのもんぺに、これも綿のはみ出たつぎ当てだらけの丹前を着て、斜め横からの風によるけながら玄関に向かつてくる。

今日は十五日ではない。まだ、あと三日ある。僕は、スリッパを突っかけ出ようとしたが、サツの方が早かった。

「婆ちゃん、どうしたの、こんな日に」

サツは椅子の一つに小さくとまると、赤茶けた手提げを広げた。そうして、濁った目で手提げの底を探している。印鑑を探しているに違いない、と僕は思い、「婆ちゃん、まだ十二日だよ。二日早いよ」といいかけると、いいやと首を振り、とり出したものは手紙だった。

顔中に皺くちやの笑いをつくり、それを高くさし出す。

さし出された手紙は、かろうじて元の紙の色を留めているほどで、糊付けは剥がれ、中身がはみ出しかけていた。

「茂男がな、送ってくれたんじや」

サツは、少女が悪戯をしたときみたいに肩をすくませ、首を傾げてみせた。僕が手を出すのをためらっていると、ほれ、とカウntaxーの下から顎をしゃくる。

受けとつてみると、それはまさしく山下サツにあてた茂男からのもので、おぼろげに読める消印から察すると、三十年以上前のものに違いなかった。

見ていいか、と聞くと、サツは歯茎だけの口を開いて、早く見ると催促する。

へもう、後一回試験を受ければ、卒業ということになります。早いものです。しかし、その前に、蜜柑作りのことをちゃんと自分のものにするため、夜遅くまで農場に残り、一日の大半をビニールハウスの中で過ごしています。勿論、バンドの連中も一緒です。連中もなかなかどうして、一本も二本も筋の通ったやつらばかりですから、葉煙草に、野菜に、花にと、頑固に己れを追求しています。その彼らとバンドを組むのも、残されたほんのわずかの間だけだと思うと、本当に淋しくなります。もうすぐ帰ることになります。寒い日が続

きますので、風邪をひかぬよう元気で過ごしてください。茂男」
まさしく茂男の手紙である。

「そうじゃろ」

サツの「ススキ」の頭が真下にあつた。真下から、カウンターごとに伸び上がり「な、な」と繰り返す。歯茎が、小豆色に光っている。

「うん、もうすぐ帰ってくると書いてある」

「じゃろ、間違いないじゃろ」

サツの唾が、手紙を濡らした。

「誰も本気にせんよ。違う、違う、いうのよ。わしをばかにしてな。だけど、ちゃんと書いてあるじゃろ。間違いないじゃろ」

サツは素晴らしい、額の皺を全部目尻に寄せた。その目尻が濡れ、涙が滴っている。

「鬼婆あ、こつちい入ったぞ。鬼婆だぞ」

園児たちがドアのガラスの隙間から、かわるがわるなかを覗き込んでいる。あかんべーをしたり、ガラスに唾を吐きかける子もいる。保母の一人がそんな彼らにようやく気付いたとみえ、両脇に抱え園庭に連れ戻していく。

「茂男がな、茂男がやつと戻っちくる。学校出て、わしの元にやつと戻っちくる」

サツは、カウンターに肘をもたせ、体をのけぞらせた格好で叫ぶ。茂男が学校に出て、ほんの二年ちゅう間に、わしはこんなに老いぼれてしまった、と涙を垂らしながら、なんみやだあ、なんみやだあ、と肩をわななかせ泣く。

鹿内さんらから聞いたところでは、サツは茂男を失うまでは、班内の会合や催しにも洩らさず顔を出し、自分が世帯主だということもあって、女としては最も積極的に周囲とかかわってきた一人だという。茂男を福岡に出す以前は、学校の役員も務め、組内の仕事も欠かしたことはない、というのだ。

「俺の好みでは、菊乃より上だったな」

鹿内さんは、そんなこともいった。

「三十も歳上でなかったら、妙なこと考えてたかもしれんぞ。一人息子の茂男にして、俺より五歳も上じゃから、あまり面識はない。なぜか、茂男のイメージは薄いよ。村に戻って、三年目の九月に例の事故だからなあ」

鹿内さんは、煙草を口の先に漂わせながら、いつも目を細める。

「気が強くて、近在の男衆は誰も手が出せなかった。なにしろ、正真正銘の陸軍中佐の妻、だったちゅうからな」

遊び好きの喜之さんでさえ、若後家のサツには一目置いていたという。

サツは、穴の開いたボロ布みたいなたオルで顔を何度も拭いた。「みんな、よってたかってわしを騙しよる。けど、今度は騙されん。騙されんのじゃ。なんてたって、この手紙がある。手紙には、茂男がもうすぐ戻っちくる、そう書いてある」

僕は、口を噤んでしまった。「そいでなあ、頼みがある。茂男とあんたとはちようど同じくらいの歳じゃから、茂男の話し相手になつてくれんかの。きつと、話しが合う筈じゃ。そうに違いない。あんたを最初に見たときから、わしはそう思うた」

サツは、赤く腫れた目を瞬かせながら、僕に頭を下げる。

事務所内には、所長も保母もいない。あいにく、他の客もいない。僕は、不安になった。こんなとき、なんと答えていいものか判断がつかない。鹿内さんでも傍にいと相談のしようもあるのだが、僕のおぼつかない経験では、頭を振っていいものやらどうかもわからない。

「茂男は目鼻立ちのはっきりした子でな、こうちよつと、母親のわしでもほれぼれするくらいじゃ。それに、エレケとかいうもんをやつとる。これは、同じ若いもんにはかわからんでな、だからこのとおり頼むじゃ」

サツは、カウンターに額を擦りつける。

僕は、この場から逃れられないことを知っている。実は、サツが玄関に近付くのを知ったときから、こんなことになるのではないかという予感があった。

「鬼婆ち、あれか。ほんま、おつかねえ」

「鬼婆にや近寄るなつち、母ちゃんがいうてたぞ」

「食い殺さるとぞ」

園庭から洩れてきた子供たちが、ガラス戸の隙間から入れ替わりたち替わりサツを覗き、小声で囁き合う。

確かにサツの風貌といったら、*「ススキ」*の髪は伸び放題で、ところどころに毛巻きができている。顔には、鍋の墨だか垢だかわからない色が幾重にも染み、目は濁っている。もんぺと丹前という取合わせも異様で、足にはゴムのサンダルを引き摺っている。

しかし、なにより目を引くのは、鋭角に折れ曲がった腰だった。それで、竹の杖にすがって歩くサツの頭は、腰の下から首がよつきり突き出ているのだった。

もんぺの腰が歩く前を、低い杖と、鎌首をもたげたみたいなスキの髪が、つかず離れず歩いていく。それは、まるで歳古りた蛇がゆつくりとくねりながら進む様に似ていた。

「あの鬼婆はな、自分の産んだ子供を次々に食い殺してしまうちゆ

う」
玄関で、誰かが叫んだ。一際、甲高い声だった。僕は、いまの声の主の心当たりがあったが、その子の姿はドアのあたりに見えなかった。

そのとき、僕の心が決まった。いつまでも喉の奥にひっかかっていたことばが、するりと口をついて出た。

「大丈夫だよ。きつと話し相手になれると思う。なんとなくうまが合いそうな気がする」

面接試験の日が迫ってきた。

が、事態は、考えもつかぬ方向に発展してきた。面接試験どころではない。

隣町に住む所長の実母が、以前からよくないとは聞いていたが、明日か明後日か、という容体に陥ったのだった。

これまで二度の大きな手術をくり抜けてきたということであったが、今回は、処置の施しようがないという段階で、なんとか夏場をしのいだというのだった。病院から出張所に電話が入ったのは、昨日の昼のサイレンのスイッチを押そうとしているときだった。

本庁の会議に出ている所長に連絡をとるため、おかげで、とうとうサイレンを鳴らしそこねてしまったのだったが、会議担当の総務課員に伝言を頼んでおいたから、所長はそのまま実家に帰った筈である。その後、変化があったという連絡はまだない。

所長の遠縁に当たる年配の方の保母の話では、酸素テントの中でなんとか息をつないでいる状態だそうで、長くて三日もてばいい方だ、という。

こういうときに不謹慎ではあるが、自分はつくづくついていない、と考えてしまう。

この調子で進めば、少なくともこれから十日以上、所長は出勤できないことになる。とすると、四日後に迫った面接試験に出ることは、どう考えても無理なことになってしまう。

もつとも、面接試験のことは所長にも、本庁の総務課にも、肝腎の母にさえいっていない。

要は、面接当日の十時に、福岡市役所の総務部というところに向きさえすれば、当面はなんとかしのげるのであるが、このことを口にするということは、この町の職員としての道義にもとる行為であり、たとえ福岡市の面接に落ちたとしても、現在の職を失うことは必至だった。

僕にこういう動きがあるということを知れば、本庁だって面白からう筈はないし、後任の補充の準備もしなければならぬ。準備には、一定の期間を要するし、そのためには、より早く僕の態度をは

つきりさせなければならぬ。

その波紋を投げることへの恐れもあった。いったん口にした以上、予測のつかない淵に自らを投げ入れることになるであろうことは、十分覚悟しなければならぬ。

もつとも、今日か明日かと、面接のことを口にしようと日延べにしてきたところ、この始末である。このままでは、動きをとろうにもとりようがない。

一方で、母にまだ話さないままだったことを、好運だった、と思わないわけではない。自分が母の元を去る、と知ったときの母の反応のほどは、大方察しがつく。

町の職員（この町に住む上では、ハイクラスの部類に入るのである）として、普通にやっていたら、五反の田や七反の畑を荒らすこともなく、この家を八代で絶やすこともない。

福岡市の職員採用試験を受けたということは、僕自身の胸の内に止めているため、母自身の落胆ぶりの程度にまで十分考えが及ばないのであるが、母の心臓に与える負担は軽くはない、ということだけは確実にいえる。

自分の気持のどこかで、所長の実家のことが原因で、いつそ福岡市の試験が全て駄目になればいい、という気持がないではない。その煩悶は、面接の日が近付くにつれ、巨大な塊となって心に重くのしかかってくる。

とはいえ、苛立ちは募るのである。

やはり自分には、大学のキャンパスを踏む資格はないのだろうか。夜間部でもなんでもいい。大学と名の付くものであれば、どこでもいい。そうでなければ、自分が片付かない。

もし、福岡市の職員になったとしても、夜間部を終えれば、また戻ってくるという道もあるではないか。

そう思わないでもない。あの、茂男もそうだ。

所長の実母が亡くなったのは、予想に違わず翌々日の未明のことだった。所長からの連絡があつたのは、出張所に着いてすぐだった。

僕は、本庁に電話を入れ、通夜のこと、告別式のことなど、聞いたとおりのことを総務課員に伝えた。そして、忌引きが十日間であることを確かめ、折り返し、所長にそのことを連絡した。

連絡し終えた途端、この数日間思い悩み続けたことが、なんの抵抗もなく吹っ切れたのだった。

これでいい、と思った。まだ八か月しか経験がなく、みんなにまどろっこしい思いをかけているであろう自分に、少しちゃんとした磨きをかけなければと、新たな目標が見えてきた。

これでいいのだ、と呟いてみた。そうすると、いいようもない安

堵が身内を満たす。なにかもこれまでどおりである。五つの班巡りも、正午にサイレンを鳴らすことも、延滞金の計算をし、産まれたばかりの牛に太郎だの亀丸だのという名前をつけることも、これまでどおりにやればいい。

けもの坂を、あのバイクがくたばるまで息せき切って上り、鹿内さんに会い、山下サツの小屋をときおり覗く。それに、サツに頼まれた、茂男とうまくやっついていく(?)ということも、自分の大切な仕事なのだ。

自分には、帰るべき場所が、ちゃんとある。

僕は、殆ど涙ぐみそうだった。

これまでの自分は、いったい何に操られていたのだったろう。ただ、同級生たちへの激しい羨望だけが、自分を支配していたに過ぎなかったのだ、多分。もともと、福岡市への思いは絶ち難いというほどのものではないし、よく考えれば、どの夜間部のどの学部に入りたい、などという資料さえ手元にはない。

僕は、すんでのことで、またまた無鉄砲をやらかしてしまいう羽目に陥るところだった。

これは、ひよつとしたら、何かの大きな意思によるものではないか。自分の軽率ぶりを戒め、道を誤らせないための極めて的確な配剤なのだ。そう考えると、僕は、所長の実母の死が、実に厳粛で、時期を得たものに思えてきた。

本庁から、次々に電話が入った。通夜の時間の確認、告別式の日時の確認、喪主の住所の確認など、一度連絡したことが殆どであったが、僕はわずらわしさを少しも感じなかった。告別式には町長と助役が出席し、花輪が贈られることや、本庁職員も通夜か告別式のいずれかにほぼ全員が出席するということが、その電話の端々から読みとれるのだった。

若い方の保母が事務室にしばらく詰めてくれるというので、どうしても急がなければならぬ書類だけをもって、バイクに跨がった。曆の上ではとうに冬であるというのに、戸外にはまだ柔らかな太陽射しが残っていた。葉を振るい尽くした銀杏や楓が、風速六十二メートルの台風にも耐えた枝々を、ピンと空に突き立てていた。

畦の柿の枝には、まだ落ちていない数個の熟柿が、陽を浴び静かに照っている。

僕は、この道を、八か月の間に何度通ったか知れないのに、こんな景色は一度も見なかったのではないか、と思った。それほど、あたりの景色のどれもが新鮮で、生き生きと息づいて見える。

これまでフルスピードで通り過ぎるばかりだった川の縁にバイクを止め、微かな音をたてて流れる水の行方を、しばらく眺めやっ

りした。

口笛を吹いた。この頃流行っているポップスの、出だしの部分である。軽いアップテンポの、出だしの部分に快いイントネーションのあるやつだ。

そうして、自分はいま、なぜこんなに嬉しいのだろうか、という自問をなげてみた。僕にこの答えが出せるわけはなかった。ただ、わけもなく、どこかが弾んでいた。

けもの坂を上るときも、口笛を吹き、リズムをとっていた。ゆるゆるとではあるが、バイクはスムーズに坂を上っていった。傍らの椎や椿の茂みの中にまばらに咲いた山茶花の一輪一輪が、それぞれに違った表情をみせ、バイクの歩みとともに従ってきた。

けもの坂には、人影は一つも見当らないのであるが、気のせいか、誰かのいくつもの穏やかな眼差しが、四囲から注がれているのではないか、と思った。

鹿内さんは、縁側に寝そべっていた。地下足袋を履いたまま、日溜まりに片頬を突いて転がっている。YKディーゼルの帽子が、落ちて、陽射しに脹らんでいた。

「いい天気ですね」

僕は、鹿内さんの傍近くまで足音をしのばせて寄り、縁側の端に腰を下ろした。

鹿内さんは本当に眠っていたとみえて、しばらく僕がいることに気付かないふうであったが、お、お、とあたりを見回し、ようやく目を覚ました。

「うんうん、いい女だったで」

鹿内さんの顔中の皺が、全部垂れ下り、釘山神社の境内に座っている猿みたいである。

「嫁あには、内緒だぞ、絶対にな」

鹿内さんは、目脂のこびりついた目をしよぼつかせ、間の抜けた声を出した。話しの端々から察すると、農協主催の慰安旅行に佐賀だか熊本だかの温泉にいつて帰ってきたばかりで、まだ仕事が手につかないらしい。

「なんせ、こうなんじゃ」

女の口真似をし、両手をくねらせて、変なしなをつくった。

「真っ白い手えで、鹿さん、お一つ、と酌をしてくれるのよ」

鹿内さんは、肩を揺らしてククツと笑い転げる。
「ところで、いい話しです。台風十九号の見舞い金が若干出ることと、希望者には、被害の状況に応じて無利子に近い金利で、融資が受けられるのです」

僕は、鹿内さんの話しをかくぐり、勢い込んでそういった。

鹿内さんが目を輝かせてくれるものと期待していたのだったが、

それを聞いた途端、笑っていた顔が急に不機嫌になった。そして、日陰の方に顔を背け、肩を落とし込んでしまった。

「そりゃあね、有り難いよ。もったいないくらいだ。でもね、俺たち五日間、あちこち視て回ったのよ。百姓ちゃあ、もうやつてられねえんだな、ホント。増やせ増やせて米を作ったら、余っただとき。次は、田圃を遊ばせろときた。ほんの何年か前まで、拝み倒さんばかりに開墾せい、開墾せいいうてた同じやつばらが、今度はなんと休耕田の見回りじゃい。」

蜜柑作れ、というのもあったね。仕方ねえから畑の半分も潰して苗植えたら、実のなる頃には肥料代にもなりやせんよ」

鹿内さんは、珍しく早口で、泡を飛ばしながら次から次に喋る。「俺たちばかりかと思うとった。けどさ、本土もどこも同じなんやな。ハウスがやられ、葉煙草がやられ、蜜柑が倒され、杉も桧も根こそぎやられ、俺たちや腰が抜けてしもうた。いまさら、何が悪いなんていえねえよ。そういうことだな、俺あ、まだ性根が戻ってこのよ」

鹿内さんは、YKディーゼルの帽子をあみだに被ると、地下足袋のまま胡坐をかいて、いまは縁側から一步も動くものか、という構えをつくった。

日頃とぼけてばかりいる鹿内さんの胸の内に、こんな激しいものが潜んでいたのかと、僕は圧倒される思いでいるのだが、自分はこういうことから逃げ出すために、ほんの先刻まで悶々としていたのではなかったか、と改めて己れに問うてみる。

「お前ら、俺たちが爪に火い灯して稼いだ金を、容赦なく掠めとりよるんぜ。そいつが、お前の給料になり、お前たちの酒代になり、お前たちの贅沢な家まで建てたりしよるんじゃ」

最初の日、玄関の鍵をもたしながら開けると、耳に刺さったことばがまた蘇ってきた。あのときのことばは、はつきりとは覚えてはいないけれど、朝から焼酎をひっかけた留さんという、酒癖の悪い爺さんの繰り言だと、話し半分聞いたものだった。

「にいちちゃん、あの人もああだから、氣いにせんとよ」
事務所を出るとき、そっと耳うちしてくれた婦人もいた。

しかし、あれは、鹿内さんのことばでもあり、喜之さんや山下サツや、出張所をとり巻く人たち、みんなの声であったのかも知れないと思う。

そんな、あきらめにも似た気持で暮らしている彼らの金を使った、飲み食いの会議にも出たりしていた自分が、そ知らぬ顔で彼らをつちやろうとしていたのだ。

僕はそこまで考え、「もう、辞めるのはきっぱり諦めました」といい出そうとして、これは自分だけの胸の内に留めておかなければ

ならないことなのだ、とあわてて口を噤んだ。

時間に急かされてはいたけれど、山下サツの家まで回ってみることにした。

サツは、茂男の手紙を見せにきて以来、扶助費の支給日になっても現われなかった。

バイクを土手に寝かせ、冬枯れの草道を上っていく。サツの家を目にするのできるあたりまで上ってきて、僕は改めてサツの住まいは、昼と夜の境い目のあたりにあるのだ、と気付いた。

まるで廃材置場のそれに見まがう潰れた家。そこは、まだこれから日が上るといふ時刻であるのに、雑木や伸びるにまかせた竹藪に覆われて、すでに陽射しが途絶え始めている。

その黒い影に没している中に、サツの住む二坪ほどの物置。物置の裏手から、微かな一筋の煙が上っている。

「茂男、け」

近付くと、内からサツの声が飛んだ。

「ああ」

僕が入っていくと、暗がりの中から呻きがあがった。ようやく目が慣れてきたのでよく見ると、サツは壁際にもたれて膝を抱いている。寒そうに竦めた体の真中に、食い入りそうな眼が光っている。といつても、サツの目には、あの白い濁りがどろりとかかっていることに変わりはない。

しかし、表情が違った。サツの目には、入ってきたものを射し貫くのではないか、と思えるほどに迫るものがあつた。

「茂男と思うたに」

サツは、体中を目にして見詰めている。そうでないことには、この暗さのなかで、サツの視力（どれほどかはわからない）が僕と茂男とを識別したのだ、とは思えない。

「必ず、もうすぐ、戻っちくる。もうすぐ、ここに戻っちくる、いうたんぞ」

サツは、呟く。僕の姿を真直ぐに見据えて、切りつけてくる。

「だから、な、そんなときや、茂男を頼む。茂男の話し相手になっちゃくれ。茂男がもうすぐ戻っちくるからに、な。茂男は氣立てのいい子じゃ。だからきつと頼む、な」

後は、なんみやだあ、なんみやだあ、となる。

僕は、そうする、きつと友だちになれそうな気がするよ、ちゃんと約束したじゃないか、と胸の内でも呟き、物置を出た。

出張所に戻ってみると、本庁の車が止まっていた。

バイクを裏の空き地に止め、事務所に入ると、顔見知りの総務課

員が二人きていた。

二人でなにを、と怪訝な面持ちでいると、「助っ人到着だよ」とMという年長の方が答えた。

Mが、僕の机に座った新人（とはいえ、僕の二年先輩であるが）に、延滞金の算出方法や住民台帳の扱い方などを教えている。つまり、現在の僕の仕事を指示しているのである。

わけのわからない僕が、これはいつたい、と口をはさみかけると、「羨ましいねえ、若い人は」という。

「福岡だろ。こんな町役場と違って、どでかいところだ。金曜日の面接、しつかりやれよ」

驚いたのは僕の方である。どぎまぎしたまま僕は、「なんのことでしょう、それは」と後ずさりしたほどだった。

「総務課員はなんでも知ってるのさ。勿論、君が一次試験を受かってから後のことは、といった方が正しいけどね。それはそうさ。君はこの町の職員だからな。例え、福岡市が君を欲しいといってきたら、うちの都合も聞かずに採れるわけないだろ」

そうだったのか、と僕は足元から掬いとられる思いだった。

「知られていたんですか」

といったきり、僕はソファアの端に腰を落とし、高鳴る動悸を押さえることができない。

「君の場合、多分こんなことになるんじゃないか、という予感があったね。採用のときから、なんとなく。第六感というやつかな」

そういえば、僕が本庁に願書をもったとき、受け付けてくれたのはこのMだったし、採用の際、書類の一切を預けたのもそうだった。

「所長がいない分、一人だけでよかったんだが、君にも準備があるうし、町としても、後任を考えないわけにはいかないしね。とにかく、金曜日は俺たちにまかせとけ」

Mは、僕に説明をしながら、もう一人に手順を教え、窓口に立つ客を上手にさばいていく。所長に怒鳴られ、この頃ようやく仕事の要領らしいものがわかりかけてきたと思っていた自分であるが、Mの手際の上さは所長のそれとは違って、目をみはるほど鮮やかだった。

この町にも、やはりそれなりの人材はいるのだ、と僕はそのことに感心している。

ともあれ、Mたち総務課員が僕のことを知っているということは、直属上司である所長も知っているとということなのだろうか。所長は、遠からず去っていくとする僕のことを知りながら、一か月以上も平静であり続けたのだったろうか。

いずれにしても、結局、いつの場合でも狼狽え、揺れ止まないの

は僕である。僕は、前後のみさかいもなく走り出し、その場所もわからず立ち止っては、ただ慌てふためくばかりなのだ。

こうなったら、もう町役場に留まることはできない。

ほんの一時間足らず前に感じた、あの胸底からの深い安堵はなんだったのだろう。

頭の中が、不意に脈を打ち始めた。わけのわからないなにかが目の前をよぎり、後へ後へと飛びすさっていく。

鹿内さんも、喜之さんも、山下サツも、茂男も。けもの坂も、権や椿の茂みも、赤い花をつけ始めた早咲きの山茶花も。あきれるほどに透き通っていた川原の水も。

「あわてずに、的確にやることだ。急いで失敗をやらかすより、ほんのわずか待ってもらうにしても、正確に処理することの方が親切なんだ」

Mのことばは、僕に向けられているといっていい。Mは僕に背を向け、ワイシャツ姿になり、延滞金をはじき、テンポよくスタンプを押し、入ってきたばかりの客に、間をおかず声かける。

母は、食卓に頭を抱えたまま、黙り込んでしまった。

まだ、次の試験に受かったわけじゃないとはいっても、僕が役場を辞めなければならぬということ、間違いのない事実である。

上の妹が、そんな予感がしてたんだ、と険悪になりそうな雰囲気を探してか、さっさと流しに立った。母は、長い間胸を押さえて苦しそうな呻きを洩らしていたが、どうにか落ち着いたとみえて、ようやく頭を上げ、「こうなるようになってたのかねえ」と、溜め息をついた。

夕食には、一つも箸をつけていない。

溜め息と一緒に、涙の雫が落ちた。母の首が、ふいにぐらりと揺れた。

瞬間、僕の胸に不吉なものが走った。

が、母は、食卓の端に両手を伸ばして懸命に体を支え、ゆっくりと体を起こした。

「やっぱり、男だからね」

そういつてゆらりと立ち上がり、いままで臥せていた布団に入り、顔まで覆ってしまった。

「まだ、受かるといふ保証はないんだし」

僕のことばは、意味をなさない。こんなことばをいまさら何度繰り返そうと、どうにもならないということとはわかっている。

そのとき、ヒュツという、風を切る音が頭上で鳴った。続いて、誰のものともしれない悲鳴があがる。その悲鳴が、得体の知れない闇の底めがけ、真逆さまに錐揉み状に落ちていく。

なにものがが僕の周囲をとり巻いている。鼻の先の、手を伸ばせばすぐに届きそうなたりに、なにかの気配が確かにある。

「そんなにまでして、自分で決めたんだ。後ろには、役場の人たちや、管内の人たちの目があることを、きつと忘れるんじゃないよ」悲鳴の向こうから、意外なほどに落ち着いた母の声が、切れ切れに聞こえてきた。母の布団は、風邪をこじらせ寝付いて十日以上敷き放しであるので、その体にはりついた形に馴染み、周囲には、湿りを帯びた寒い空気がうっすらと流れている。

けもの坂にさしかかったところで、ハンドルをとられ、あやうく椎や椿の茂みの中に転落しそうになった。

台風による道路の被害跡の補修がようやく終わり、けもの坂には、真新しい角砂利が一面に敷かれている。実際、新しい砂利の撒かれた上ほど走り難いものはない。

僕の五〇Cのつぎはぎだらけのバイクは、どういうわけか前輪と後輪の幅が三センチも違い、おまけに後輪のタイヤが極端に擦り減っているため、なんでもないとこころでスリップし、これまでも何度か田圃や溝に突っ込みかけたことがあった。

すんでのところでブレーキを踏み込み、あわててエンジンを切り（エンストを起こすのは最も得意技とするのであるが、こんなときに限って技を発揮しようとはしない）、道路の縁を飛び出しかけたところであやうく止めることができた。それにしても、ハンドルをとられた途端に、九十度近くも振られたのは初めてだった。

一度エンジンを切ると、なかなか点火してくれないキックを、今度は腹立たしくなるほど踏み込まなければならぬ。

十数度目にやっと息を吹き返したマシンを、恐る恐るローですべり出させる。ギアチェンジのタイミングを誤ると、本気でストライキでも起こしかねない。

ゆるゆると坂を上っていく。昨日一輪一輪と、目に鮮やかに飛び込んできた山茶花の赤が、今日はなぜか薄い汚れとなつて目につく。坂道の傾斜も、いつもよりきつく、威圧感をもって前方から覆い被さってくる。

鹿内さんの庭先が見え始めた。榎の木の生け垣の内側から、細かい煙が上がっている。黄色い車体の耕耘機が、生け垣の外に止めてある。

バイクを乗り入れると、作業着の上に綿入れをはおった鹿内さんが庭の隅にしゃがんでいて、煙たそうな目で、おう、といった。

鹿内さんの手には、毛を全部筆りとられた鶏が、一羽下げられている。鶏は首から先が切り落とされていて、白いつぶの露わな肌を日に晒し、いまちようどその肌を焚き火に焙られるところだった。

「はあ、と鹿内さんは、バツの悪そうな顔をしてみせ、「今夜、お籠もりでな」といった。

縁側では、奥さんが、大根を二つの箆に山盛りに刻んでいる。

「釘山神社の屋根が、まあだつるつるのままだちゆうになあ。ま、これも縁起もんだで。こんなときだけん、なおさら景気つけんとな。氏子の殆どが出稼ぎちゆうに、せめて残つとるもんだだけでも氣勢をあげんとよ」

鹿内さんは、焚き火に焙られ、脂を垂らし始めた鶏を裏表に向きを変えながら、焚き火の燃えさしを器用に銜え煙草に火を点けた。

「奉納ちゆうか、まあしきたりじゃけんな」

煙草の煙が喉に染みたのか、鹿内さんは大きな咳を続けて二つした。あみだに被ったYKディーゼルの帽子が、後ろにずり落ちそうになる。

「山下の婆ちゃんもきますか」

「いや、なにせ、神社は茂男の最後を見た場所じゃけんな。いまじやあ、そんなこたあ全部忘れちまつたらしいけど、お籠もりにはこんのよ。かわいそうにの、もう二十何年になるかや。が、ひよつとしたらどつかあ、ちつとは頭の隅に残つとるかもしれない」

鹿内さんは、もう一つ、クシヤツと空にむかって大きくくしゃみをした。

僕は、明日福岡市の面接を受けにくつもりでいるという話しをきり出そうとして鹿内さんを訪ねたのだが、やめた。いつまでも、黙ったままではいるのは心苦しいとは思いつながら、気持のどこかに、まだ自分が出張所を出ることが決まったわけではない、というところまどいが残っているのだった。

狭い物置のどこにもサツはいなかった。

竈には温もりはなかったし、いつもサツが背もたれにしている壁にも、黴臭い臭いが漂っているだけで、人の気配はなかった。

土間には荒縄で編んだ藁が敷かれ、古いレンガの上に板片が乗せられただけの卓袱台には、いつ使ったものとも知れない一組の茶碗が重ねてあった。茶碗の内側には、青黒い飯粒がこびりついていて、芋の皮や、木の実の皮がひからびていた。

暗がりに慣れてきた目であたりを見回しても、二坪ぐらいの狭い空間には、目ぼしいものはなにもない。小さい古びた茶籠筒と、綿のはみ出た薄い布団が、部屋の隅に三つ折りに畳まれているのが、唯一家具らしい家具である。

僕は、帰ることにした。しかし、外に出るのが一苦労だった。入るときには気付かなかったのだが、戸を内側から開けようとして、そのたてつけの悪さに閉口した。蝶番のネジが弛み、物置そのもの

も傾いていて、簡単には戸板が持ち上がらない。

やっとのことで外に出ると、今度は開いた戸が閉まらない。そんなに重たい戸板でもないくせに、力まかせに押ししても、物置そのものが揺れ動くばかりで、埒があかない。

とうとう元の場所に戸を押し込めるのをあきらめ、把手のところを下がったビニール紐で、錆びた釘に戸板を結わえつけようとしているとき、背中になにもものかの忍び寄る気配を感じた。

「茂男、け」

茂男、ということばがなかったら、猫でも忍び寄ったのではないかと勘違いするところだった。山下サツが、ゴム草履を引き摺り、二つに折った腰をいっぱい伸ばして、僕の足元から見上げている。

「茂男だろ、な、違いないだろ」

サツは、いきなりズボンにすがりついてきた。

「やっぱり、戻ってな、ほら、やっぱり戻ってきた」

骨の上に、しなびた皮がはりついていて、ただのサツの手、どこにこんな力が潜んでいたのかと思われるほどの勢いで、むしゃぶりついてきた。

僕は、サツがいったいどこから現われたのか、と聞こうとしたのだったが、サツのあまりの激しさにことばを無くしてしまった。

サツは、嗚咽を洩らし出した。僕のズボンに頬を打ち付け、犬の吠える声に似た悲鳴をあげ泣くのである。サツは、薄い靄の浮いた目を僕に向け、涙を流しっぱなしのまま首を振る。

そうしているうち、僕の心に、ひよっとしたらサツの目はどうの昔から映像を結ぶことはなく、彼女のうちのどこかの部分が、かつての茂男の像をときおりフラッシュみたいに浮かび上がらせているのではないか、という疑問が湧いてきた。

その証拠に、サツの濁った目は、最初僕に注がれていると思ったのが、僕のはるか後ろの雑木の闇のあたりに向け、見開かれている。「僕はね、明日茂男さんに会いに行くんだ」

僕の口から、自分でも考えていなかったことばが飛び出した。

瞬間、ズボンを掴んでいた力が弛み、しばらくサツは口を開けたまままっていたが、なにを思ったのか急に後ずさった。

「茂男に、茂男に会う、とな」

「うん、明日福岡に行く」

そうか、と唸ったきり、サツは草叢にうずくまり、息もつかずに身構えている。

「茂男に会うてくるとな」

サツは「ススキ」の頭を振り上げ、大きな息を吐き出すなり、懐の中をさぐり始めた。あばら骨の胸を露にし、千切れて、元の色が何色だかわからない下着をめくり、帯を解いて、ようやく封筒らし

いものを取り出した。

その封筒を僕の鼻先に突き出し、見ろという。たじろぐ僕の様がわかるのか、サツはなおも見ろ、見ろと迫る。

意外に新しいその封筒を手にとると、中に折りたたんだものがある。

「こんなよい都合があるものか。わしはな、つい先だって茂男の手紙を受け取ってからというものの、なんとかして茂男に返事をしようとな、大急ぎで書いたのよ。だから、頼む」

サツは、茂男にこの手紙を渡してくれと、頭の上に手を組み、何度も雑木の闇に向かって首を垂れる。この手紙にはな、一日も早よう戻ってこい、と書いてあるんじや、とサツは地面に這わんばかりに首を下げ、額を土にこすりつける。

僕は、そつと紙片を開いてみた。しかし、その便箋らしい紙には、一字の文字もない。二枚目を開いた。そこにもなにもない。最後の三枚目にも、とうとう文字は現われなかった。

「婆ちゃん」

といいかけて、僕は口を噤んだ。サツは、嗚咽を洩らし、露のままの肩を震わせ、頼む、頼むからな、なんみやだあ、なんみやだあ、と頭を下げ続ける。

出張所に戻ると、Mの指示で若い方がサイレンのスイッチを押そうとしているところだった。

いつもの習性で、十二時には事務室に入って、スイッチを押すつもりだった僕は、Mたちの姿を見て、改めてそうだった、と自分にいい聞かせる。

テレビの時報に合わせ、若い方がスイッチを押した。サイレンは、命じられたとおりに唸りをあげ、息を何度も継ぐいつもの音色で、出張所の屋根にとり付けられたスピーカーを通じて四方に流れ、ストンと消える終わり方で止んだ。Mが、よしぴったりだ、と僕に背を向けたまま、若い方にいった。

なんのことはない、僕が八か月かかって築いてきたと思っていた場所が、たったの一日か二日足らずで、僕の匂いまで消え去ろうとしている。勿論、もともと、僕の場所がここに存在したのかどうか、疑わしいところではあるが。

「所長が、君には済まないことをしたと伝えてくれ、とのことだ。まだまだ、一週間以上も休まねばならんから、とな」

Mが、所長からの電話の内容を伝えてくれる。

「なに、僕たちがいることだから、君は何も心配せず、明日は思いきりやることだ」

Mは、明るい調子でいった。

「あ、それに、屋根の修理と、窓枠取り替えのことを発注したからね」

と、机の上の見積書をかざして見せる。屋根と窓枠は、台風十九号でやられたままになっていて、予算がらみのこともあって、本庁から待ったがかけられていたものだった。そんなことは、総務課のMの手腕なら、いともた易いことなのだろう。

「飯だ、飯だ」

二人は、ワイシャツ姿のまま、事務室の裏にある和室に入っていた。

僕には二か月前、急に自分に転職のことを決意させたものがなかったのであるのか、いま思い出そうとしても思い出せない。なにかわけのわからない、奇妙な「嵐」の予兆。そうとでも呼ぶしかない漠然とした心のざわめきが、胸の内にも吹き募っていたということだけを、微かに覚えている。

Mたちの勧めもあって、五時前に出張所を出た。

そんな時間に帰る僕に驚いたのか、バイクの方も、気持の準備ができていないらしく、なかなかエンジンが点火しなかった。結局キックをあきらめ、出張所前の坂道をニュートラルで転がし、勢いがついたところでローにクラッチを踏み込んでやっとエンジンを始動させた。

ハンドルは最初、自宅への道に向いていた筈であったのだが、我に返ったとき、いつの間にか、けもの坂にさしかかっていた。

心の隅のどこかに、鹿内さんや、喜之さんや、サツたちの住む釘山の深い木々の重なりを、この目にしておきたい、という気持があったのだろうか。

あるいは、茂男が倒れていたという、釘山神社の真下に流れる川原をもう一度見ておきたい、という願いがあったのかもしれない。それに、サツから託された内ポケットの封筒が、茂男の最後の場所に、知らず知らずのうちに誘おうとしたのかもしれない。

僕は、坂の手前で軽くブレーキを踏み、エンストを起こさないよう注意深くバイクを止め、坂を見上げた。

殆ど毎日上っていく坂であるが、改めて手前から見上げると、まるで社の階段を思わせるほどの急傾斜で伸び、その中段のあたりから上は、深い木々に隠れて見通すことができない。

木々の向こう、といっても釘山ではまだ低地のうちに属するのかもしれないが、台風十九号の猛威にしろうじて耐えた杉や桧の重なり向こうでは、鹿内さんや、老いてなお氏子総代を務める喜之さんたちが、もうできあがっているに違いない。

鹿内さんのあの鶏も、班の連中の胃袋に納まり、かつて茂男たち

若い衆が籠もつてエレキをひいていたという堂では、ゆつたりしたテンポの神楽唄が始められていた頃かもしれない。その神楽唄に合わせて、喜之さんや鹿内さんたちが踊る。

「今年は何んどの年じゃったけんど、毎年毎年こうはあるまいて」
「俺たちや、昔から冷飯くいには馴れとるけんに、しようがあるめえ」

「ハハア、蜜柑作つたときには切り倒せとよ。お次は、米ができ過ぎとる、だとお。ほんまに、今年はおできとるけん」

「それよ、それ。もう、馴れとるさあ。馴れるとなあ、もうなんでもかんでもしようがねえ。なあに、そうしかあるまいによ」

坂の奥で、鹿内さんたちが踊っている。僕は、マフラーを揺るがすバイクの音を聞きながら、鹿内さんたちの声を聞いている。木々の向こうで、きつと猿の顔より赤くなつた鹿内さんや喜之さんたちが、腰を奇妙に漂わせ、笑い合いながら踊っているに違いない。

釘山の班の一番奥。そう、山が空に接するあたりでは、夜の闇に没した物置の隅で、サツが僕に託した手紙の返事を、首を長くして待っている。ただでさえ、二つに折れた腰をもっと低くして、なんみやだあ、なんみやだあ、と唱えているに違いないのだ。

サツに約束したからには、僕は必ず茂男の返事を持ち返らねばならない。そのために、僕は明日はなにがあるうとも、福岡市に出向き、茂男の農学校を訪ねなければならぬ。

農学校のことは調べている。何度か地図の上で訪ねたので、C駅を下り、南へ歩いて二十五分、建物はコンクリートの四階建て、というところまで知っている。

僕は、釘山神社をはるかに望むことのできる位置まできて、そのままじつと神社の森を仰いでいたが、気合いを込めて気持を振り払うと、バイクのハンドルをターンさせ、思い切つてアクセルを吹かせようとした。

そのとき、ふつくらとした風が僕の頬を撫でた。もうすぐ初雪になるかもしれないという時期に、変に温みのある風が、けもの坂から、ふう、と降りてきた。

僕は、内ポケットを探った。サツの手紙が、指先に触れた。急いで、もう一方のポケットを探った。

面接通知である。通知文と、職種などの説明文の二枚がある。僕は、封筒の二枚目を抜き出すと、大急ぎで簡単な飛行機の形に、それを折った。小学生の頃、よく風に流して遊んだ紙飛行機である。

しばらく止んでいたけもの坂からの風が、またふうと吹き始めた。僕は、その風の高み目がけ、紙飛行機を力いっぱい投げ上げた。

飛行機は、最初、風に押され、潰されそうにたよりなげに舞い上がったが、落ちかかったところで後ろからの柔らかな風に乗る、す

いと羽根を広げて水平飛行に移った。
僕は、紙飛行機が落ちゆく先を見るより早く、バイクのアクセセルを力いっぱいにかし、発進した。

(了)